

## 高等学校社会科「世界史」の授業はどのように始められたのか

### —当時の資料と回想・聞き取りからの考察—

茨木 智志

#### はじめに

本稿は、1949年4月から実施された高等学校社会科「世界史」の授業がどのように始められたのかを、当時の各種の資料に加えて教師や生徒の回想・聞き取りを通して考察するものである。

「世界史」は他の教科・科目と異なり、1949年4月の実施時には何も決まったものがなかった新しい教育であった。「世界史」成立史の解明に取り組んでいる筆者は、「世界史」授業がどのように始められたのかという問いをもって、当時の様々な資料を探索し、当時の教師または生徒であった人々の回想を読み、さらには直接に話を聞いてきた。もちろん全体から見れば、ごく一部に過ぎないことは確かであるが、これまでに集めた情報を整理して、「世界史」授業がどのように始められたのかという問いに迫っていきたい。

なお、記載した高等学校(高校)名は基本的に当時のものである。また、敬称はすべて省略とさせていただいた。

#### 1. 「世界史」の開始と授業の模索

「世界史」は、1948年10月に設置が通知され<sup>1</sup>、1949年4月から授業が実施された。設置を決めた文部省からは、1949年4月に学習指導についての通達が出されたのみであった<sup>2</sup>。しかも、学習指導要領も検定教科書もなかった<sup>3</sup>。また、依拠すべき世界史学の研究も存在しない状況であった。このような中で、教師は「世界史」の授業に「素手で<sup>4</sup>」取り組まざるを得なかった。

当初は、「世界史」の実施に否定的な意見が多かったようである。1948年の「年末」

<sup>1</sup> 「新制高等学校教科課程の改正について」発学第448号、1948年10月11日。

<sup>2</sup> 「高等学校社会科日本史、世界史の学習指導について」発教第247号、1949年4月11日。

<sup>3</sup> 最初の「世界史」学習指導要領は1952年3月に発行された。最初の「世界史」検定教科書は正式には1952年4月から使用されたが、それ以前は準教科書が使用された。当時の「世界史」教科書については、拙稿「『世界史』教科書の出発」(長谷川修一・小澤実編著『歴史学者と読む世界史教科書』勁草書房、2018年)を参照されたい。

<sup>4</sup> 鈴木亮「日本史と世界史の統一的把握」(歴史教育者協議会編『歴史教育五十年のあゆみと課題』未来社、1997年、80頁)。鈴木亮は1949年10月に中学校の教師となり、1950年度から静岡県沼津西高校で「世界史」を担当した人物である(「シンポジウム・その一 二十五年目の世界史教育」『歴史教育研究』第56号、歴史教育研究所、1974年7月、3～4頁)。

での講習会を担当した尾鍋輝彦は、1949年7月の講習会で次のように述べている。

東洋史、西洋史を分けた方が良いという説は非常に支持者が多い考えです。昨年〔1948年：引用者注〕の講習会のときもディスカッションしたり、こういう意見が非常に強烈に出ました。そうして、これは実際家から出たばかりでなしに、専門の学者の中でも相当こういう意見があります。…東洋と西洋の歴史というものは近代以前は大体別々に発展していく。古代中世には東西の交渉が非常に少ない。そのような時代を一緒にして取扱うことがむつかしく、また不便である。学習の上でも不都合である、地理上の発見以後世界が一体となりつつあるけれども、やはり十九世紀の中頃以後になって真の世界史が成立したのであった。それまではやはり東洋、西洋を別々に取扱った方が教え易いし、学び易い。そういうことが実際家や学者の中にある意見であります。…結局現場の先生方は、分けた方が良いという意見が濃厚であったのであります<sup>5</sup>。(1949年7月の発言)

「東洋史、西洋史を分けた方が良い」という主張は、19世紀中頃まで別々に発展してきた東洋と西洋の歴史は、別々に取り扱ったほうが「教え易いし、学び易い」ものであり、「世界史」として一緒にすることは難しく、「不便」であり、「学習の上でも不都合」というものであった。そして、このような意見が教室で授業を担当する「実際家」の歴史教師のみならず、歴史研究者でも少なくないことを述べている。

このような状況下で「世界史」が実施されるに当たって、一種の混乱状況が見られたことが確認できる。1949年夏の座談会で、東京都立文京高校の橘高信は、「実のところ混迷状態にあると申すのが本当の姿でありましょう<sup>6</sup>」と表現していた。中には社会科の選択科目に「世界史」を置いてすらいなかった高校もあったようである<sup>7</sup>。「世界史」を実施するにしても、名称は「世界史」でありながら実質的には東洋史・西洋史による「世界史」の授業であった例もしばしば見られる。尾鍋は前述の1949年7月の講習会で、「現場の先生方のやっておられるのを見ますと、実際に分けておられる方が非常に多いようでございます<sup>8</sup>」と述べていた。1949年10月にお茶の水女子大学附属高校に赴任した野口和子は1949年度の授業について次のように回想している。

はじめは、世界史を、東洋史と西洋史に分けて受け持ちました。昭和24(1949)

---

<sup>5</sup> 尾鍋輝彦「世界史教育について」(家永三郎・尾鍋輝彦『日本史の諸問題 世界史教育について』革新社、1950年5月、87～88頁)。

<sup>6</sup> 「討論 世界史の基本問題」(尾鍋輝彦編『世界史の可能性—理論と教育—』東京大学協同組合出版部、1950年3月、6頁)。

<sup>7</sup> 東京都立板橋高校定時制で1949年4月から1年間講師をした小林新三は、「社会」と「英語」を担当したが、このときに「世界史」はなかったと回想している(2010年7月の発言。「インタビュー記録 歴史教育体験を聞く 小林新三先生」『歴史教育史研究』第8号、歴史教育史研究会、2010年12月、78頁)。

<sup>8</sup> 尾鍋輝彦・前掲「世界史教育について」、88頁。

年度は、生徒の希望により、東洋史が一講座、西洋史が二講座でした。…主事先生〔校長：引用者注〕が私に言われるには、「…西洋史を一講座、持つように」と、…。「大学の入試もあるのだから、少なくとも第一次世界大戦まで終わるように」と言われましたが、10月に行ったときには、まだ、キリスト教の歴史をやっていました<sup>9</sup>。(2009年9月の発言)

また、1949年に明治学院中学・高校で非常勤講師として「世界史」を担当した吉田寅は次のように回想している。

明治学院でのこのときの世界史は、週5時間を、東洋史2時間と西洋史3時間に分けて、二人の教師が授業を行っていました。私が〔国語科漢文と：引用者注〕兼任したのは、この中の東洋史2時間の部分です。…世界史を、東洋史と西洋史に分けて授業することは、現在から見れば、違和感がありますが、学問の系統にそっている面があるため、ある意味で授業はしやすかったです<sup>10</sup>。(2008年12月、2009年2月・3月の発言)

高校生であった中村匡男は、次のように回想している。

ちょうど私が麻布高校へ入ったのがその頃〔「世界史」開始の頃：引用者注〕です。二年三年で世界史じゃなかったですね。西洋史・東洋史だったですよ。教科書も西洋史・東洋史と別でした。先生も別で。旧制の中学校の東洋史と同じようになっていましたよ。私はあの頃は本当は世界史なんだけれども、実際は西洋史・東洋史だと思いますね。終わったのは両方とも18C〔18世紀：引用者注〕初めです<sup>11</sup>。(1974年7月発行)

このような回想は、教師の立場、生徒の立場、また伝聞としても少なくない。東洋史・西洋史に分けた「世界史」授業が、この当時にどの程度の割合で存在したのかを明確にすることは困難である。ただ、旧制中等学校から移行した新制高校では、東洋史の担当者と西洋史の担当者が5単位の「世界史」を2単位と3単位に分けて別々の教科書（副教材）を用いて授業を受け持つことは、教える教師にとっても、教わる生徒にとっても都合がよいことと見なされたものと推測される。特に大学入試を念頭に

---

<sup>9</sup> 「インタビュー記録 歴史教育体験を聞く 野口和子先生」(『歴史教育史研究』第7号、歴史教育史研究会、2009年12月、90頁)。

<sup>10</sup> 「インタビュー記録 歴史教育体験を聞く 吉田寅先生」(『歴史教育史研究』第6号、歴史教育史研究会、2009年3月、68頁)。このときの様子は、吉田寅「「世界史」教育と中国塩業史研究の回顧」(吉田寅先生古稀記念論文集編集委員会編『吉田寅先生古稀記念 アジア史論集』東京法令出版、1997年、361～362頁)でも述べられている。

<sup>11</sup> 前掲「シンポジウム・その一 二十五年目の世界史教育」、5頁。

置いた受験校では後々までこのような形態での「世界史」が存続したことも確認できる<sup>12</sup>。

また、若い教師が新科目「世界史」を前に苦労した回想が多くみられる。大学卒業後の1950年4月に横浜市立港高校定時制に赴任した横山十四男は次のように回想している。

昭和25年度〔引用者注：1950年度〕は「世界史」と「一般社会」を合計15時間ほど担当しました。…「世界史」の授業のために参考とした本は各100頁ぐらいの紙表紙の講座本…を中心にしてましたが、その他は覚えていません。当時は良い参考書がありませんでした。…そういえば、有高巖先生の東洋史に関する戦前の本を戦後に読んだ記憶があります。学習指導要領は当時読んだ覚えがありません。西洋史は何を参考にしたのか忘れてしまいました。「世界史」は講義形式で授業をしました。定時制であったこともあり、体系的に進めるというよりも、少しでも自分の知っていることが出て来ると、その話ばかりしていたような記憶があります。つまり自分が話の出来る内容のみを大きく取り上げて行い、忠実に教科書どおりに進めるということとはなかったと思います。ただ、「世界史」以外の授業も含めて、新しい民主主義の在るべき姿、またヨーロッパの市民革命などのすばらしさなどを一生懸命に説明しようとしていました<sup>13</sup>。(2003年8月の発言)

1947年9月に大学の国史学科を卒業して群馬県の旧制中学に就職した菱刈隆永は、次のように回想している。

四九年〔1949年：引用者注〕春に、安中高校に転じた時は、世界史を担当させられたが、教科書のない時期で、自分で立てたテーマで、勝手なことを講じた。

…群馬県では、当時日本史を教える人はいても、…世界史をやる人は少なかったように思われる。それに、一般社会や、さらには英語まで持たされた。新制高等学校発足の前後の混乱期で、それだけに活気にもあふれていたし、私も若さで、無謀

---

<sup>12</sup> 1953年4月に秋田県立秋田高校に入学した原田善治は、2年生で選択した「世界史」が東洋史と西洋史に分かれて別々の教師の担当で実施されていたことを述べている(2013年9月の発言。「インタビュー記録 歴史教育体験を聞く 原田善治先生」〔『歴史教育史研究』第11号、歴史教育史研究会、2013年12月、87頁〕)。また、1954年12月の座談会で尾鍋輝彦が「東京の真中の一流校」の中にも「東洋史と西洋史を分けてやって」いる高校があることを述べている(「共同討議 世界史をどう見るか B教師」〔上原専祿・江口朴郎・尾鍋輝彦・山本達郎監修『世界史講座Ⅷ 世界史の理論と教育』東洋経済新報社、1956年、247～248頁〕)。さらに後の時期においても、東洋史と西洋史に分けた「世界史」授業が行なわれていた事例が散見される。

<sup>13</sup> 「インタビュー記録 歴史教育体験を聞く 横山十四男先生」〔『歴史教育史研究』第1号、歴史教育史研究会、2003年10月、49～51頁〕。

なことをやってのけたという感じである<sup>14</sup>。(1974年7月発行)

東洋史・西洋史で担当者を分けないまでも、「世界史」としてどのように授業を構成するかは大きな問題であった。東洋史・西洋史の割合が話題になった状況を1948年3月に大学を卒業して高校教師となった倉員保海は次のように回想している。

…世界史というものをお創りになった方は、従来の東洋史・西洋史という区分を問題にしないで新しいものを創ろうという意味だったと思うんです。ところが教育の現場から出て来た第一の疑問点は、「この世界史の中に戦前からの東洋史と西洋史を何%ずつ入れたらいいでしょうか」という質問であったと思います。…現場で教えていると、どうしても、四分六にするのか、七分三にするのかという疑問が起きてきたわけです<sup>15</sup>。…(1974年7月発行)

東洋史と西洋史の割合は「世界史」実施初年度に話題になり、議論となっていた。特に文部省の見解として様々な数値が流布して、混乱に拍車をかけたことがうかがえる<sup>16</sup>。現場の混乱状況を示す一つの例である。一方で、東洋と西洋の交渉史に「世界史」構成の新しさを見出した例も見られる。広島県の基町高校(広島基町高校)の狩野正明は1949年に次のように述べている。

私の今の段階では、東洋史と西洋史の関係する部面、即ち東西交渉史の面を重点的に取上げて世界史をでつち上げている現状です。東西交渉だけが世界史を成り立たしているといつてよいでしょう<sup>17</sup>。(1949年12月発行)

「東西交渉史が世界史の内容だと考えるものが少なくなかった」ことは、1950年から「世界史」を担当した鈴木亮も指摘している<sup>18</sup>。東西交渉史の重視は、「世界史」の準教科書や検定教科書においても確認できる。東洋史と西洋史の単なる組み合わせではない「世界史」を打ち出すときに、最初に着目された事項であった。

---

<sup>14</sup> 菱川隆永「教科書について思うこと」(『歴史教育研究』第56号、歴史教育研究所、1974年7月、1頁)。

<sup>15</sup> 前掲「シンポジウム・その一 二十五年目の世界史教育」、4頁。

<sup>16</sup> 尾鍋輝彦編・前掲『世界史の可能性—理論と教育—』での座談会(10～11頁)において、高校教師・橘高信が、講習会で東洋史と西洋史の割合を述べた尾鍋輝彦に対して「世界史を総合的に見るとすれば、それは私には納得出来ません」と批判をしている。それに対して、西洋史と東洋史の比率を「七対三」とすべきであるという主張は、東洋史の割合を減らさないためのものであり、個人的な見解であったのが数値のみが文部省の公式見解として独り歩きし、「九対一」「二十対一」と全国に伝わっていった旨を、尾鍋は積明している。

<sup>17</sup> 「世界史座談会」(『月刊世界史研究』第2号、広島史学研究会、1949年12月、4頁)。

<sup>18</sup> 鈴木亮・前掲「日本史と世界史の統一的把握」、80頁。

授業形態については、講義式の「普通の授業形態<sup>19</sup>」であったという回想がある一方で、生徒の活動を取り入れた授業の例も見られる。高校生であった大熊圭祐は次のように回想している。

一九四九年、私は高校三年生であった。四月から「世界史」の授業は始まったものの、教科書はなく、一学期途中に入手した史学会編『世界史概観』を教科書代わりに使用した。担当の寺沢保之先生は東大出身の学究的な方で、満州から引揚げてきたので史料が無いといわれながらも、毎時間ノートを作って来られ、プリントするには紙等も不自由なので専ら板書してくださり、それを一生懸命ノートした。その間「アテネの民主政治」等についてグループ学習をしたこと、レポート作成のために市立図書館に通ったこと、時に学校から映画を見に行き授業中にディスカッションしたこと等、寺沢先生の授業とともに印象に残っている<sup>20</sup>。(1980年3月発行)

準教科書を利用して講義をしつつ、グループ学習やレポート作成、さらに映画を活用した討論など、従来と異なる活動を盛り込んだ「世界史」の授業が進められていた例である。また、授業時数不足を補う意味で、「世界史に関係の深いテーマを選んで、演劇を指導」した例などもあった<sup>21</sup>。

ただし、社会科として生徒を主体とした学習が文部省から通達で指示されたにもかかわらず、新卒の教師にはなかなか難しかったという回想もある。倉員保海は次のように回想している。

最初は発表形式ですが、これは御存じの通りに教師が講義をするのは望ましくないという考え方で、じゃ、生徒が発表する。すると「どうい参考書でしょうか」ということになります。それで無難な参考書を紹介すれば、大類先生、山中先生〔大類伸、山中謙二：引用者注〕の、戦前から続いている本になって。それを生徒が適当にダイジェストして、発表するのを聞いていて、そういう授業にはっきりいって虚しさを感じました。…打ち明け話になりますが、やっぱりこういう授業をやっていると行き詰るんです。すると仕様がなから歴史以外のものにおすがりしまして、私が良くひっぱったのは井上靖さんの歴史小説なんです。あれを読ませると正直なところ、難しい参考書等を発表させるよりははるかに生徒の感銘度は深かったとい

---

<sup>19</sup> 板津直字書簡(筆者宛、2005年3月1日付)。長野県長野高校2年生であった1948年度は、担当教師が異動で交代するまで「アメリカの教科書で授業展開」であったこと、高校3年生であった1949年度は「日本史」「世界史」とともに「現在行なわれているような授業になっていった」ことを回想している。

<sup>20</sup> 大熊圭祐「私の卒業論文 西部劇の舞台にアメリカ史の原点を求めて」(『歴史教育研究』第64号、歴史教育研究所、1980年3月、40～41頁)。後に、歴史教育研究所、荒井信一・吉村徳蔵編『歴史学への旅立ち 下』(三省堂、1981年、152～153頁)に再録されている。

<sup>21</sup> 笹尾菊枝『21世紀へ贈る言葉—世界史教育40年の回顧—』祥文社(印刷)、(2000年)、18～20頁。

う事を覚えています<sup>22</sup>。… (1974年7月発行)

生徒による「無難な参考書」の「ダイジェスト」の発表に「虚しさ」を感じつつ、発表の授業を工夫していた様子を述べている。

教師からの「世界史」への疑問はその後も継続したようである。文部省は、全日制高校普通課程を対象とした1952年7月末現在での教育課程実施状況調査を実施し、その中で「現行の教育課程についての意見」を「各教科ごとに余白を設け、…自由記入をしてもらった<sup>23</sup>」。「世界史」実施4年目のこととなる。この中の「社会科」の「世界史」については、次のような意見が出されたことが紹介されている。

「世界史」では、「東洋史・西洋史に区分せよ」(18〔校：引用者注。以下同じ〕)  
「必修」(15)「時間数不足」(13)が多く、「1、2年で必修」(6)「2、3年で必修」  
(6)「独立」(6)などが見られ、…<sup>24</sup>

回答216校中の18校が「東洋史・西洋史に区分せよ」と主張している。この数字を多いとみるか、少ないとみるかは判断が難しい<sup>25</sup>。ただし、一番多い意見が「東洋史・西洋史に区分せよ」という意見であったことは、実施4年目になっても「世界史」は、やりにくく、難しい科目と考える教師も存在していたことを示している。

以上のように、教師から存在の可能性すら疑われたまま、学習指導要領や教科書もない状況下で「世界史」は実施が開始された。担当者も教科書も東洋史と西洋史に分けたままでの外国史の授業を「世界史」の名称で継続した例、内容として東洋史と西洋史をいくつかの割合で組み合わせて「世界史」として授業を行なった例、東西交渉史を「世界史」として重視した例、社会科の学習の要素を盛り込んだ「世界史」授業の例、「虚しさ」を感じつつ生徒による発表で「世界史」を始めた例など、教師による様々な苦悩と模索の中で「世界史」が始められたことが確認できる。

## 2. 社会科としての「世界史」授業の検討

このような状況下で、授業を担当する教師によって1949年度から社会科としての「世界史」の授業を検討していた事例が確認できる。

<sup>22</sup> 前掲「シンポジウム・その一 二十五年目の世界史教育」、4～5頁。

<sup>23</sup> 「教育課程実施状況調査補遺」(『中等教育資料』第2巻第2号、文部省中等教育課、1953年3月、26頁)。

<sup>24</sup> 同上、27頁。

<sup>25</sup> 社会科全体で一番多い意見は、56校からの意見である「一般社会」に「時事問題」を統一せよ、であり、次が18校からの意見であった①「1年生での一般社会は内容が広く学習困難」、②「日本史」を「必修にせよ」、③「世界史」を「東洋史・西洋史に区分せよ」であった(同上、27～28頁)。

第一に、橘高信の「社会科世界史」授業の実践を取り上げる。

「社会科世界史」として、その理論を検討し、学習活動の指導を構想して、授業を実践したのが、東京都立文京高校の橘高信であった。以下、尾鍋輝彦編『世界史の可能性』（東京大学協同組合出版部、1950年3月）に掲載された橘の論稿（「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」）を中心に、同書所収の「討論」での橘の発言等を参考にしながら、橘の「社会科世界史」の実践の特徴を考察する<sup>26</sup>。

橘の論稿は、前半での「社会科世界史」の理論と後半での「社会科世界史」の学習活動の指導からなる。「社会科世界史」について、その世界史の理論と学習活動の指導の双方を不可分のものとして論じているのが特徴の一つである。

前半では「社会科世界史」の理論を論じている。「『世界史』という教科の新しい名に目が眩み、なす所を知らなかった」、そして「歴史教育の門外漢」である橘は、世界史や歴史に関する内外の書籍を渉猟することで、「社会発展の過程が辿られるように歴史は学ばれるべきもの」と確信する<sup>27</sup>。ところが、「社会科で教課される世界史は学問ではない」、「学的背景の無い世界史はあり得ないであろう」という意見に、橘は接する<sup>28</sup>。それに対して、「社会科歴史」は「知識」や「考える事」のみではなく、「考え得た所を実践するという要素が加わって」いることを指摘し、「社会科世界史は知識の学問である以上に実践への学であるとされないだろうか」と提起した<sup>29</sup>。さらに、すべての「実践」の前提になる「人間の間柄のあり方、あるいは社会のあり方」を問う学である倫理学や社会学の立場から「人間の社会発展の科学的研究」がなされることが「社会科世界史」の「学的背景」となると主張した<sup>30</sup>。このような「学問としての世界史」は樹立していないため、橘は歴史学者に「社会発展の当為の学としての世界史」の研究を進めることを要請している<sup>31</sup>。以上のことに基づいて、橘は、「近代的市民の育成」と「絶対に平和を愛好する意欲に滾れる若き世代の育成」のための世界史<sup>32</sup>として次のように主張した。

現在のところ、人間の社会的発展の過程を科学的研究によって辿る歴史学の立場に立ち、平和実現の為常に多数の人間の尽した成績に照らして、過去の人間の社会

<sup>26</sup> 尾鍋輝彦編・前掲『世界史の可能性—理論と教育—』。本書に、橘を含めた13人の1949年「盛夏」（7月と推測される）に開催された討論の記録である「討論 世界史の基本問題」（1～142頁）と橘高信「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」（271～291頁）が収録されている。なお、橘の論文は、拙稿「史料研究 橘高信著「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」（1950年）—高校からの「社会科世界史」の主張—」として、『歴史教育史研究』第9号（歴史教育史研究会、2011年12月）に再録されている。

<sup>27</sup> 橘高信・前掲「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」、272～273頁。

<sup>28</sup> 同上、274～275頁。

<sup>29</sup> 同上。

<sup>30</sup> 同上、275～276頁。

<sup>31</sup> 同上、276頁。

<sup>32</sup> 同上。



の営みの跡を再編成すべきである。かくすることによって、これまでの歴史——日本史、東洋史、西洋史——の学び方が教育的方法においても、学問的理論においても大いに批判され様相を変え世界史として綜合されるであろう<sup>33</sup>。

このように橘は、日本史学・東洋史学・西洋史学からではなく、教育や学問のあり方から出発して世界史そして「社会科世界史」を理論的に位置付け、教育者と歴史研究者にその実現を求めた。そうすることで、これまでの東洋史、西洋史の外国史や日本史の教育と学問も「世界史として綜合される」と主張した。1949年7月の「討論」では、「社会科の一般目標にそって世界史をいかに構想するかということ」に、教師は「混迷状態」にあり、「迷っている」ことを述べ、「日本にはまだ学問的に世界史の研究がないため「構想の拠り所がない」と指摘している<sup>34</sup>。加えて、西洋史と東洋史の比率で世界史を説明することに「私は納得出来ないと主張していた<sup>35</sup>。その検討の結果がここに説明されている。この考え方は、橘が歴史学を専攻した「世界史」教師ではなく、倫理学を専攻して「世界史」を担当した教師であったことが背景にあると考えられる<sup>36</sup>。

さらに、特に「社会科世界史」としては、「歴史意識」「一人間として」「国民として」「国際社会に処する者として」の4点の生徒の到達目標を提示し、その4点の「よるべき理論」として「歴史学の理論」「教育学の理論」「政治学の理論」「人倫の学の理論」と仮に名づけた理論が掲げられるとした<sup>37</sup>。そして、これらの「理論」によって教師が「世界の各地域の各時代の社会に触れてその根源的人間相互の关系的営みを掘りあてることにより、従来の歴史の研究の成果を世界史において総合的に再編成」でき、「総合的に人間社会の発展の段階や姿を抽出し概念に」のぼすことができると説明した<sup>38</sup>。こうすることで、広汎な「世界史」も「何等かの形で現実の諸問題に挑みかかる生徒の関心の中から学ぶことが出来、教育的要請に向って将来の社会への実践的意欲を昂揚するであろう」と主張した<sup>39</sup>。

1949年7月の「討論」で橘は、「社会科世界史は学問的な要請から生れたというよりは、むしろ教育的な要請から生れたと申してよいと思います」と、教師として「社

---

<sup>33</sup> 同上。なお、原文の右側に付された傍点を引用では上に付した。

<sup>34</sup> 前掲「討論 世界史の基本問題」、6頁。

<sup>35</sup> 同上、10頁。

<sup>36</sup> 橘は東京帝国大学文学部倫理学科で和辻哲郎と金子武蔵に師事し、1943年に卒業した後は、東京都立豊島中学校（旧制。後の東京都立文京高校）で修身と公民を担当した。出征を経て、戦後に復職した後は社会科などの授業を受け持ち、1949年度には新しくできた「世界史」を担当していた。橘の経歴などについては、「インタビュー記録 歴史教育体験を聞く 橘高信先生」（『歴史教育史研究』第10号、歴史教育史研究会、2012年12月、71～76頁）を参照されたい。

<sup>37</sup> 橘高信・前掲「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」、277～278頁。

<sup>38</sup> 同上、278頁。

<sup>39</sup> 同上。

会科世界史」を積極的に受け止めている<sup>40</sup>。そのため、東洋史・西洋史をやめて「世界史」とした問題について、「現在生徒達が見聞きする出来事がそのまま関心を世界全体に結びつけることが出来ることから、この問題を解決したらよいのではないかと思っております」と述べ、「結局東洋と西洋に分かれていたのを何故一つにしたのかということ、生徒の方からいえば大した問題じゃないと思われます」と指摘している<sup>41</sup>。

橘の論稿の後半部分は、「社会科世界史」の学習活動の指導について述べられている。まず、学習活動の指導のねらいを、「生徒自らの問題の抽出」「生徒自らの解決」「学習の計画とその実行」「生徒の個性の発揮」「批判的態度を活潑にする」の諸点にまとめ、それぞれについて歴史学習での望ましい指導のあり方を説明している<sup>42</sup>。ここでは従来の講義式の歴史学習を、いかに生徒を主体とする社会科としての歴史学習に転換すべきかが説かれている。

次に、ひとつの単元を例として、その開始から終了までの学習活動の指導について詳細な解説がなされている。具体的には以下のような構成で説明されている。

- 一 導入の段階
  - 1 誘導係生徒の選定
  - 2 単元への導入
  - 3 作業課題及び同目標の決定
  - 4 班の編成
  - 5 作業単元及び同目標の決定
  - 6 学習単元及び同目標の決定
  - 7 学習活動予定の編成
- 二 個人学習の段階。
  - 1 研究資料の選択
  - 2 資料の理解及び整理
  - 3 作業課題の研究、報告書の作成。
- 三 班の学習の段階
  - 1 作業課題研究報告の班内発表
  - 2 各個人の研究成果の理解整理
  - 3 作業単元の研究報告書の作成
  - 4 発表の為の準備
- 四 級学習の段階
  - 1 発表及び質疑応答
  - 2 単元整理<sup>43</sup>

---

<sup>40</sup> 前掲「討論 世界史の基本問題」、129頁。

<sup>41</sup> 同上、12～13頁。

<sup>42</sup> 橘高信・前掲「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」、279～283頁。

<sup>43</sup> 同上、283～291頁。

この論考は1949年度末（1950年3月）に発行されたものであるため、ここで説明されたものは「世界史」実施初年度の自己の授業実践をまとめたものとなる<sup>44</sup>。上記のように「導入の段階」「個人学習の段階」「班の学習の段階」「級学習の段階」の各段階に分けて、学習活動に対する教師の指導の実際が紹介されている。

「導入の段階」において「単元の学習内容の大体の見当を生徒達の既に知っている知識によって付けさせ、その上で解決したいと思う問題を持つに至らせ<sup>45</sup>」、生徒各自が「作業課題」とその「目標」を持った後に、「作業課題」の類似や関連性により班を編成し、班ごとの「作業単元」とその「目標」を設定する。そして、生徒各自の研究調査に入り、報告書を作成する（「個人学習の段階」）。その成果を班に持ちより、班の研究としてのまとめと発表の準備を行なう（「班の学習の段階」）。班ごとに発表を行ない、質疑応答を経て、単元の整理をさせる（「級学習の段階」）。以上のような手順で一つの単元の学習を完結させる。説明では各係の選出や役割、各段階での教師の指導上の留意点などが具体的に示されている。

1949年7月の「討論」で、授業形態について橘は次のように述べていた。「単元学習が望まれることから概説講義ではなくて、生徒達自らの学習意欲を根幹として、グループ・システムを存分に生かした自学自習を理想とする<sup>46</sup>」が、非常に困難な状況にある。しかし、「グループ・システム」は、「世界史においては是非取入れて行かねばならぬものと私は考えております<sup>47</sup>」と主張した。関連して、「グループのものが一致協力して共同で自分達の問題を自分達の力で解いて行くことこそ、社会活動に要求される最も重大なことではない<sup>48</sup>」かとも強調している。また、自学自習について、従来の講義式授業に備えたものではなく、「問題を、疑問を、切実な関心を自ら求め出して、それを自分達の力によって出来るだけ自分達の学習にみよって解決して行くやり方」であり、それは「極端にいいますと、学習活動すべてが一種の創作活動でなければならぬのであります」と述べていた<sup>49</sup>。このような観点から進められた授業実践の実際が、橘の論稿における後半の「社会科世界史」の学習活動の指導としてまとめられている。

橘による「社会科世界史」の理論と学習活動の指導についての論稿は、画期的なも

---

<sup>44</sup> 橘自身の回想では、「まとめるもつと以前で…実際にこういうことで授業していると」というものと述べている（2011年11月・12月、2012年2月・5月の発言）（前掲「インタビュー記録 歴史教育体験を聞く 橘高信先生」、78頁）。

<sup>45</sup> 橘高信・前掲「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」、284頁。なお、橘は「世界史」実施に向けて、生徒の関心に対する調査を実施していた（橘高信「世界史学習の実践—構想への段階—」『日本歴史』第18号、日本歴史学会、1949年8月）。調査実施は「世界史」実施直前と推測される。

<sup>46</sup> 前掲・討論「世界史の基本問題」、7頁。

<sup>47</sup> 同上、8頁。

<sup>48</sup> 同上、133～134頁。

<sup>49</sup> 同上、133頁。

のであった。生徒の主体的な学習活動を中心とした「社会科世界史」の単元学習の実際の指導を、これほど具体的に示しつつ詳細に解説したものはなかった。「世界史」実施初年度の何もかもがない時期に、社会科としての「世界史」の学習活動を模索し、実現していたものであった。「世界史」を決定した文部省が実施に際して簡単な通達<sup>50</sup>を出すことしかできなかつたこと、歴史研究者も「世界史」の根拠となる世界史研究の可能性を論じている段階であったことを考慮すると、その位置づけの重要性が確認できる。

しかも「社会科世界史」の学習活動を指導していくに際して、世界史がいかなるものであるのかを、橘自身が構築していかなければならなかつた。橘は戦後日本の置かれた状況から教育に求められた要請を出発点として、「社会科世界史」のあり方を論じた。その根拠となりうる歴史研究を研究者に求め、その学習のための高校生の活動を教師がいかに指導していくかを提示した。橘の論稿は、初の世界史教育論ともいべき性格を持っていた。

世界史の探究のあり方と社会科としての世界史学習活動のあり方という二つを不可分のものとして検討した「社会科世界史」の模索であった。この「社会科世界史」においては、橘が述べるように、日本史や東洋史・西洋史の教育は、さらにはそれらの学問も「世界史として総合される」ものであった。

第二に、「世界史」実施を受けて「世界史学習プラン」を作成した上野実義の取り組みを取り上げる。

広島高等師範学校附属高校（広島大学附属高校）の教員であった上野は、広島大学文学部史学科を母体とする広島史学研究会において「世界史」の検討をしている。「世界史学習プラン」は「世界史」教科書の発行を念頭に置いたものであり、このプランをもとに1950年3月以後に『世界史研究』として発行され、準教科書として使用されることになる<sup>51</sup>。ただし、上野はその後も単元学習による「世界史」授業を継続していたこと<sup>52</sup>を考慮すると、単なる教科書の構成案ではなく、「世界史」実施初年度における自身の学習プランであったと見なすことができる<sup>53</sup>。上野が作成した案に対して、研究会では「各種各様の質問が続出」し、「活発な議論」が展開されたが、「結局それでゆこうという事に」なったという<sup>54</sup>。また、上野自身は「はじめて教科（社会科）

<sup>50</sup> 前掲「高等学校社会科日本史、世界史の学習指導について」（1949年4月11日）。

<sup>51</sup> 広島史学研究会編（杉本直治郎・千代田謙・上野実義責任編集）『世界史研究』上巻・下巻、柳原書店、1950年3月5日（上巻）・同年8月25日（下巻）。

<sup>52</sup> 上野実義書簡（筆者宛、1985年10月26日付）。なお、広島大学附属高校に在職していた1953年度まで「世界史研究」を用い世界史の単元学習をして来ました」と述べている。

<sup>53</sup> 作成された広島史学研究会編・前掲『世界史研究』上巻・下巻と「世界史学習プラン」とを比べると、「単元」については表記の違いの他に変化はない一方で、「章」・「節」・「項目」については、大まかな流れに変化はないながらも、順序の変更や追加・削除が見られる。具体的な教科書執筆の共同作業の中で若干の修正が施されたものと思われる。

<sup>54</sup> 前掲・上野実義書簡。なお、広島史学研究会での編集作業について、藤井千之助は「何回も開かれ、

としての世界史を創るべく努力した<sup>55)</sup>と位置づけている。

以下、上野の論考「教科としての世界史(上)(下)」(1949年11月・12月)<sup>56)</sup>をもとにして、「世界史学習プラン」について考察する。上野が作成した「世界史学習プラン」は次のようなものであった。

表1：上野実義「世界史学習プラン」(1949年)

単元	章	節・項目
(世界史への導入)		学習の目的 世界史学習の目的、世界史の構成
		学習の方法 世界史の研究法、時代観念
一 人間はどのようにして文明状態にまで到達したか	先史時代の生活	旧石器時代 初期の人類、環境と文化、後期旧石器時代の生活
		新石器時代 狩猟文化から牧畜文化へ、農業の開始、村落社会の形成
	文明の発生	金属器時代 農耕文化の躍進、氏族社会の変貌、古代国家への道
	都市国家と統一国家	古代オリエント及びアジア国家 古代東方国家、印度古代国家、中国古代国家 (所謂)古典古代国家 ギリシヤ国家、ヘレニズム国家、ローマ国家
二 古典文化はどのようにして発生したか、又それはどのような遺産をわれわれにのこしたか	古典文化	古代オリエント及びアジア文化 古代東方文化、印度古代文化、中国古代文化
		(所謂)古代文化 ギリシヤ文化、ヘレニズム文化、ローマ文化
三 封建制度はどのようなものであつたか、又それは世界各地でどのように異つた発	封建社会	封建制の意味
		西洋封建社会 ローマ的・ゲルマン的社会、主従関係と武士生活、荘園と農民生活

内容の配列や執筆分担などが討議された」と回想している(藤井千之助「歴史教育論攷(3)―世界史教科書について―」[『広島経済大学研究論集』第18号第4号、広島経済大学経済学会、1996年3月]。後に「世界史教科書について」と改題されて、藤井千之助『歴史教育研究序説』[広島経済大学地域経済研究所、1997年]に再録)。

<sup>55)</sup> 上野実義「社会科教育25年の回顧―私の歩んだ道―」[『社会科研究』第22号、日本社会科教育研究会、1973年11月、2頁]、および上野実義『教科教育としての歴史教育』(明治図書出版、1974年、84頁)。なお、広島史学研究会編・前掲『世界史研究』に関して、上野が言及している著作は他に、上野実義『社会科歴史教育法』(理想社、1955年、126頁)、および上野実義「諸外国の世界史教育と日本の世界史教育」(平田嘉三編『新しい世界史教育の方法』明治図書出版、1972年、214～216頁)がある(後者は、後に「世界史教育の構成とその展望」として上野実義『社会科教育論考』[広島大学出版研究会、1974年、188～190頁]に収録)。他に、広島大学教育学部附属中・高等学校社会科研究会編著『中学校/高等学校社会科25年の歩み』(増進堂、1975年、25頁)が簡単に触れている。

<sup>56)</sup> 上野実義「教科としての世界史(上)」[『世界史研究月報』第1号、広島史学研究会、1949年11月]。および、上野実義「教科としての世界史(下)」[『月刊世界史研究』第2号、広島史学研究会、1949年12月]。

展をしたか		東洋封建社会 中国封建社会（明代まで）、北方民族の社会（遼・金・元）
	宗教生活	キリスト教世界 教会制度、法王権と皇帝権、修道院、キリスト教文化（含ビザンツ文化） イスラム世界 イスラム教とその社会、イスラム文化
四 世界史上人間精神はどのように解放され、又発展していったか	諸発見	人間の発見 文芸復興、宗教改革、ヤソ会と東洋諸国
		物の発見 三大発明
		土地の発見 地理上の発見、東西交通、南洋 東南アジア
	経済生活の発達	西洋世界 都市の発達（ハンザ同盟）、商工業の発達、荘園の崩壊、市民の抬頭 東洋世界 宋代の社会、明清の社会
五 近代民主主義はどのような発展をしたか、又それはどのような様な障碍をのりこえねばならなかつたか	民主主義の発達	アンシヤン・レジーム 絶対主義の成立（重商主義） 民主主義革命 イギリス市民革命、アメリカ合衆国独立、フランス革命、ナポレオンと諸国家の独立
		近代文化 啓蒙思想以後の潮流 自然科学の発達
	資本主義の発達	産業革命とその影響 産業革命、資本主義の発達とその影響 資本主義と世界 印度の植民地化と民族運動、中国の植民地化と中国革命、明治維新と日本の帝国主義化、ロシアにおける資本主義の発達と十月革命
六 世界平和への努力はいかになされているか、又いかなる努力が必要であるか	民主主義の理想と現実	帝国主義と戦争、ファシズムと戦争、デモクラシーと平和運動
	新しい文化の課題	二つの世界、現代文化（原子力時代）、討論会

注1：出典は、上野実義「教科としての世界史（上）」（『世界史研究月報』第1号、広島史学研究会、1949年11月、4～7頁）の「世界史学習プラン」である。表記および表中の空白部分は原文のまま。

注2：原文の表中に記載されている「章」・「節」への注記と「項目」の「(注意)」は省略した。

この上野の「世界史学習プラン」は、単元学習による社会科「世界史」の全体の計画を、「世界史」実施初年度の授業実践の中から作成したものであった。上野はこの中で「社会科の特色と歴史の特色を共に満足させることを目指した<sup>57</sup>。

社会科を「学問体系」でなく、「生活の体系」とでもいわなければならぬ」と捉え、生徒が選んだ「自分達の問題」すなわち単元を自分たちで解決の方法を見出

<sup>57</sup> 上野実義・前掲「教科としての世界史（上）」、2頁。

していくやり方が社会科の特色と捉えた<sup>58</sup>。そして、社会科の教師を、「先ずCurriculum（教科課程＝教育計画）の構成者であり、勿論単元（Unit）の作成者でなくてはならない」と位置づけた。「世界史」の単元の作成については、次のように説明している。「一般社会科」の単元はX軸としての「スコープ」とY軸としての「シーケンス」の二つの軸により見出されるが、「世界史の場合は更に第三軸即ちZ軸が必要に」なると主張した<sup>59</sup>。そして、X軸（「スコープ」）には「「ポツダム宣言—新憲法—基本的人権—民主主義—世界平和—一つの世界」といつた様なものゝ中から考え、見出したい」とし、Y軸（「シーケンス」）には「文部省も示している様な単なる社会科としてではなく、やゝ学問の形に近い歴史として与えなければならない。而も文化史的、社会経済史的要素を多分にもつたものでありたい」と説明した<sup>60</sup>。Z軸は「歴史独特の分野」として、「歴史の様相」、「歴史の過去性」、「歴史的發展をあらわす」、「開放された円環の問題」などと説明されている<sup>61</sup>。

取り上げる世界史については、次のように説明している。「時代（区分）概念」は、「西洋世界の發展を尺度」とする。その理由は「最も整然と發展の段階がきずき上げられ而も地球表面上各地域に最も大いなる影響力を持つて来たのはヨーロッパ世界であるという意味」においてであり、「その構成の中へ東洋世界の歴史をいかに融合させて「一つの世界」なるものをつくるか」は、「却々たやすい事ではな<sup>なかなか</sup>い」と説明している<sup>62</sup>。そして、具体的には「西洋世界の發展」を「先史」「古代」「中世」「近世（近古）…其の一」「近世…其の二」「現代」の6つに分け、それぞれの時代について「社会、経済、政治、宗教、文化の五項目」の中で「何を著しい特色としてもつているか」「何を重点的に各時代からとりあげるか」を検討する<sup>63</sup>。その検討の結果、「例えば」として、「古代」では「学問」、「中世」では「封建制度」、「近世〔其の一〕」では「人間性」、「近世〔其の二〕」では「民主主義」があげられるとする<sup>64</sup>。この結果を「アジア世界へ延長」し、「六つの時代を代表する事がら」が明らかになると「それを中心に単元を構成する事が出来」とした。ただし、「西洋東洋を通じて同質のもの」をもとにして「一つのまとまり」である単元を構成するため、単元によっては「同時代的のものには」ならず、それは「東西の特色」であり、「世界史の真相」であると注意している<sup>65</sup>。また、「幾多の歴史事象の中にはどうしてもこれらの単元の中につて来ない部分の残る事は止むを得ないとしつつも、生徒がそれに気付くことは「大い

<sup>58</sup> 上野実義・前掲「教科としての世界史（下）」、1頁。

<sup>59</sup> 同上、1～2頁。

<sup>60</sup> 同上、2頁。

<sup>61</sup> 同上。

<sup>62</sup> 上野実義・前掲「教科としての世界史（上）」、2頁。引用文中のルビは引用者による。

<sup>63</sup> 同上。

<sup>64</sup> 同上。

<sup>65</sup> 同上、2～3頁。

に有意義」であり「時には教師がヒントを与えて」他日の研究を促すこともよいと補足している<sup>66</sup>。

「世界史学習プラン」を見ると、上記の説明のように、おおむね通史的な年代順の構成を採りながら、「章」に当たる部分（「単元」の中の「項目」とも称している）で「古典文化」「宗教生活」「諸発見」「経済生活の発達」などの枠組みを使って世界史の単元を作成している。その中で「西洋世界の発展」のみならず、「東洋世界の歴史」を「融合」させて「一つのまとまり」・「一つの世界」の構成を試みている。そして、それぞれの特色を持った世界史の各時代を単元として学ぶことで、現在の自己の課題に取り組ませることを意図している。社会科としての世界史の教育の全体像を、社会科と歴史の特色を生かして、独自に立案したものであった。

以上の2つの事例の他にも、「世界史」教科書（準教科書）作成に関わり、1949年度から教師が主体となって「世界史」を検討した例が、日教組近畿協議会高等学校教科書編纂委員会による『新考世界史<sup>67</sup>』や信濃教育会による『新稿世界史<sup>68</sup>』にも見出せる。

橋高信の「社会科世界史」の実践と上野実義の「世界史学習プラン」は、世界史への迫り方は異なるものの、どちらも社会科としての「世界史」の教育のあり方を基礎に置き、「世界史」の授業を実践したものであった。何もない中、多くの教師が一種の混乱した状況のもとにあったときに、独自に社会科としての「世界史」授業の実例を示したことの意味は大変に大きい。

### 3. 高校生からの「世界史」への期待

ここでは、授業を受ける立場である高校生が「世界史」をどのように見ていたのかを考察する。

新制高校の社会科は1年次で「社会」（「一般社会」）5単位が必修であり、2～3年次で各5単位の4つの選択科目から少なくとも1科目を選んで、社会科としては10単位以上を履修することが求められた。前述のように、4つの選択科目は「東洋史」「西洋史」「人文地理」「時事問題」であったのが、1949年度から「日本史」「世界史」「人文地理」「時事問題」と改められていた。文部省は、この「選択教科制」（選択科目制）を新制高校の重要な基盤をなすものと見なし、「従来のような固定学級をもつ学校は一校もない、というようにしなければならない」と説明していた<sup>69</sup>。つまり生徒本人の選択科目の希望を尊重した学習指導計画の編成を高校に求めていた。ただし、完全な

<sup>66</sup> 同上、3頁。

<sup>67</sup> 日教組近畿協議会高等学校教科書編纂委員会編（執筆責任・原随園）『新考世界史』上巻・下巻、教育タイムス社出版部、1950年2月25日（上巻）・同年4月25日（下巻）。

<sup>68</sup> 信濃教育会編『新稿世界史』信濃教育会出版部、1950年4月15日。

<sup>69</sup> 文部省学校教育局『新制高等学校教科課程の解説』教育問題調査所、1949年4月、106頁。



実現は困難であったと推測される。1949年7月に「世界史」と「日本史」の履修状況を尋ねられた東京都立文京高校の橋高信は次のように答えている。

〔社会科選択科目の：引用者注〕選択のことについては、…各学校によつてまちまちで、例えば世界史は準必須科目として、二年なら二年の時に全生徒がやつているところもあります。国史〔日本史：引用者注〕の方はそれが無いようです。両方選択のところは世界史の方が多ようです。また選択の場合は学年の差別をなくしているところもありますが、そこでも世界史の方が多ようですから、結局世界史の方が多く選択されていることになります。もちろんどつちか一方を選べばよいのです<sup>70</sup>。(1949年7月の発言)

橋の回答のように、実際には学年ごとに履修する科目を定めるなどの対応を取っていた高校も存在した。また、選択の場合にも、「日本史」に比べて「世界史」のほうを選ぶ生徒が多いという印象を語っている。

その他にも、「世界史」の履修を希望する生徒が多かったという回想が少なくない。久坂三郎は次のように述べている。

一九四八年から五〇年は、宮崎県の富島高校という元農業学校で普通科が新設された学校にいまして、当時世界史一クラス・日本史一クラス・地理一クラス・英語一クラス持って居りました…。…その頃、世界史それに地理もかなり人気でしたが、世界史が二年目には大変に数が多くなって…。何か生徒に世界史というものに希望があったんでしょね<sup>71</sup>。(1974年7月発行)

また、久坂は、「世界史」は「当初、一般に他の社会科選択科目を圧倒して、多数の生徒に選択された<sup>72</sup>」(1956年12月発行)とも述べている。

原則として自由選択の中で「世界史」を選ぶ生徒が多かったことは、当時の調査からも確認できる。

1951年11月1日現在の千葉県公立高校3年生(35校、7638名)中、24校5129名を対象とした「高校選択科目(通常普通課程)」の調査では、過去3年間で社会科の選択科目から選択した科目について、次のような数字を示している<sup>73</sup>。

<sup>70</sup> 前掲「討論 世界史の基本問題」、13～14頁。橋は、東京都立文京高校では2年生で「世界史」を「準必須」としていたとも述べている(同、8頁)。

<sup>71</sup> 前掲「シンポジウム・その一 二十五年目の世界史教育」、3頁。

<sup>72</sup> 久坂三郎「世界史教育の目標と内容」(歴史教育者協議会編『歴史教育の諸問題』明治図書出版、1956年、150頁)。

<sup>73</sup> 芦野孝一「千葉県における高校選択科目(通常普通課程)に実際について」(『中等教育資料』第1巻第3号、文部省中等教育課、1952年4月)。芦野は「千葉県指導主事」である。

表 2：千葉県公立高校 3 年生の社会科選択科目の履修状況（1951 年 11 月現在）

人員		計 5129	
教科	科目	選択人数	百分率
社会	日本史	3128	61.0
	世界史	3548	69.2
	人文地理	2463	48.0
	時事問題	1380	26.9
	計	10519	205.1
	平均一人当たり単位数		10.3

注：芦野孝一「千葉県における高校選択科目（通常普通課程）に実際について」（『中等教育資料』第 1 巻第 3 号、文部省中等教育課、1952 年 4 月、17 頁）に掲載の表から引用。

1951 年 11 月の 3 年生は、1949 年 4 月に高校に入学し、1 年次に「一般社会」を全員が履修した後に、1950 年度・1951 年度の 2・3 年次に「世界史」を含めた社会科の各 5 単位の 4 つの選択科目から 1 つ（以上）の履修が求められた生徒たちであった。表を見ると、2・3 年次に平均 10.3 単位、すなわち平均 2 科目を選択して履修していること、その中で 69.2% の生徒に履修された「世界史」が 4 科目の中で最も多く選択されていたことが確認できる。

また、翌 1952 年度に文部省は全日制公立高校の普通課程（総合高校と普通課程のみの商業学校を含む）1479 校から 2 割に当たる 295 校をランダムに抽出した教育課程の実施状況調査を行なった（回答 223 校、回収率 75.5%）<sup>74</sup>。この中で、1952 年 7 月末現在の普通課程の 3 年生がこの 3 年間で社会科の選択科目をどのように履修したのかを調査している。

表 3：高校普通課程 3 年生の社会科選択科目の科目別履修状況（1952 年 7 月現在）

	普通総合高	普通高校		総合高校		生徒数	履修生徒の% (全体)
	校種別						
	志願率別学	49.9%	50.0%	49.9%	50.0%		
	校種別	以下	以上	以下	以上		
	対象生徒数	12152	8020	16859	6162	43193	
履修生徒の%	時事問題	21.7%	18.0%	26.9%	14.6%		22.0%
	人文地理	54.3%	50.4%	58.6%	42.7%		53.6%
	世界史	58.3%	75.9%	68.1%	78.6%		71.1%
	日本史	63.8%	65.2%	63.0%	79.0%		65.9%

<sup>74</sup> 「高等学校生徒の選択科目選択状況および卒業単位取得状況について〔その 1〕」（『中等教育資料』第 1 巻第 11 号、文部省中等教育課、1952 年 11 月）、および「高等学校生徒の選択科目選択状況について〔その 2〕」（『中等教育資料』第 2 巻第 1 号、文部省中等教育課、1953 年 1 月）。

注：「高等学校生徒の選択科目選択状況について〔その2〕」（『中等教育資料』第2巻第1号、文部省中等教育課、1953年1月、27頁）の表「(ハ) 社会科」から一部を引用。「志願別学校種別」は「上級学校進学を志願した者の数の百分率」である。「履修生徒の%」は、「それぞれの科目をそれまで3年間に履修した生徒数の全生徒数に対する百分率」である。

1952年7月の3年生は、1950年4月に高校に入学した生徒たちである。表での記載を省略したが、4つの社会科選択科目から2つを選択した生徒が最も多く（75.1%）、次いで3科目（16.2%）、1科目（7.0%）、4科目（1.7%）の順になっている。「一般社会」の他に大半の生徒が2科目を選択する中で、71.1%の生徒が選択した「世界史」が最も多くの生徒に履修された科目となっている。また、「世界史」は「日本史」とともに、上級学校進学を志願する者が過半数を超える学校で、より多く選択されていることも確認できる。

以上の2つの調査例を見ると、普通課程に在籍する大半の生徒が社会科選択科目から2つを履修する中で、「世界史」が最も多く選択されていたことが分かる<sup>75</sup>。学校での指定による準必須科目化された例もあったとは考えられるが、基本的に自由選択の中で、「世界史」は多くの高校生により選択されていたことが確認できる。「世界史」は、当時の高校生から非常に期待された科目であったと言える。

## おわりに

本稿においては、1949年4月から実施された高等学校社会科「世界史」の授業がどのように始められたのかを、当時の資料や回想・聞き取りを通じて追ってきた。存在の可能性すら疑われたまま、学習指導要領や教科書もない状況下で、教師による様々な苦悩と模索により「世界史」が始められた。また、橘高信や上野実義のように社会科としての「世界史」の授業を追究して実践したものも存在した。一方で、「世界史」は多くの高校生により選択されており、非常に期待された科目でもあった。これらのことが確認できる。

本稿で提示した当時の高等学校での「世界史」をめぐる動きが、今日において進められている歴史教育の検討において参考にされることを切に願うものである。

## 付記

様々な形でご教示を賜りました先生がたに、厚く御礼を申し上げます。

---

<sup>75</sup> ただし、これらの2つの調査は基本的に公立高校の全日制普通課程を対象としたものであるため、「世界史」選択に関わる高校全体として正確な数字は確認できていない。特に、工業高校などでは「一般社会」に加えて、選択科目を1つだけ履修する機会が多かったのではないかと推測されるが、そこでの各科目の履修率などは不明である。